



経営の散歩道

川中経営所長 川中清司

▼わびる文化は民族によって異なる。

アルペールビル・オリンピックピックのスケート・ジャンプで着地に失敗した伊藤みどりが、「すみませんでした」と頭をさげるシーンが放映された。

これを見て「日本人はなぜあやまるのだ」とアメリカ人の友人が言った。

政治の舞台でも、日本の政治家はよく詫びる。これらが欧米人の目には異様にうつるらしい。

▼そう言えば彼らはめったにない「アイアム・ソーリー」とは言わない。仮に自動車事故で相手方が入院しても見舞いには行かない。行けば自分に非があったことを認めた証拠になるからだという。

しかし飛行機の中でちょっと肩さきがふれても、とっさに「エクスキューズミー」という。混雑するショッピングセンターで体がふれても「ソーリー」という。そんなとき、ほとんどの日本人は知らん顔をしている。▼わびるは英語でアポロロジヤだがapologyの語源はギリシア

語のアポロジからきていて、弁明するとか謝罪するという意味がある。

たとえ間違ったことをしでかしても、その理由を弁明することとあやまることになる。こういう考え方が欧米人にある。その根底には一種の合理主義が流れている。

▼桜井元環境庁長官が、「日本



は侵略戦争をしようと思っていたわけではない」という主旨の発言をしたことがアジア諸国の反感をかい、責任をとって辞職した。

戦後五十年の節目に当たり、村山内閣が戦後処理の具体案づくりの最中だけに、中国や韓国からの強い反発をうけて発言撤回だけでは収拾がつかなかった。閣僚が失言のために外国から抗議をうけて引責辞職した例は

少なくない。しかし発言の内容を徹底的に説明して自己の所信を披れきし、ことの是非を論究し合うという姿勢が弱いのはどうしたことか。

▼桜井発言で問題なのは

「戦争が始まれば異常な精神状態になることはある。特に第一線の人がよかれと思ってやったことでも迷惑をかけたことも多いと思うので、全体のことはある程度わびる必要がある。しかし日本だけが圧倒的に悪いことをした、という考え方で取り組むべきではない」

第七十六回

すみません

その2

といった部分だが、自分の考えを述べるのならもっと論旨を整理して、事実をあげて実証的に説明すれば、理解してもらえむきもあるのではないかと。

舌足らずのままで、わびて辞職して幕引きにするというのはあまりにもふがいない。

▼それとはじめから自身がないのなら言わない方がよい。「口はわざわいのもと」の格言もある。

欧米のことわざにもConfine your tongue, let it confine you。「舌を縛らないと、舌に縛られることになる」というのがある。とかく饒舌は謹みたい。▼かと言って、自分の立場をはっきり主張できない弱腰外交でも困る。

石原慎太郎とソニーの盛田の両氏が書いた「NOと言える日本」にアメリカとの交渉に当たった黒田通産審議官の例をあげつぎのように述べている。

「強大なパワーのあるアメリカという大男が拳固をふりかざせば、小男の日本は沈んでしまうという意識もあってアメリカは難題を押しつけてくる」

「殴るなら殴れ、おまえらのほうが恥じをかくぞ、と踏んばってにらみ返してきた。

「もちろん、やみくもに「ノー」を叫ぶのではなく、なるほどと思わせる理屈を述べてから言う」

外交というのは、こうでなくてはならない。

▼経済は一流、政治は三流といわれる日本にとって、外国との掛け合いが国運を左右することになりかねない。

「すみません」の使いこなしもまた、国際舞台での重要な技術のひとつだ。